

コミュニケーションの発展過程が 地域空間に対する意識に与える影響

松村 草也¹・羽藤 英二²

¹学生会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:soya@bin.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp)

しまなみ海道の開通に伴う愛媛県今治市中心部および周辺部・島嶼部の交通ネットワークの変化,それに伴う生活スタイルの変容について地域住民に対してヒヤリング調査を行い,取得できたテキスト-空間データをもとに個人間に存在する地域イメージの全体像をウェブグラフの概念を用いて分析を行った.従来のヒヤリング調査では地域住民に対して分析者が外的な他者として質問を行い回答する形式が一般的であるのに対し,本研究では風景づくり活動として地域住民の中に分析者が入り込む形式で行う.風景づくり活動として地域で行ったコミュニティラジオ放送での発話内容の分析では風景づくり活動の参加者の地域意識の時系列的な変化について把握され,より包括的なヒヤリング調査手法・分析手法を提案する.

キーワード: 風景づくり,オーラルヒストリー,テキストマイニング,市民意識

1. はじめに

(1)背景と目的

本研究では,まちづくりの学習プロセスにおける人間関係とコミュニケーションの内容そのものに着目して,変化する意識構造についてよりよい理解を得ることを目的としている.コミュニケーションには,まちづくりのプレーヤー自らが地域調査を行う中で生成された対話や,プレーヤー間の対話が存在する.内容や質のことなるコミュニケーションを通して,まちづくりのソーシャルネットワークそのものは大きく変化するし,個人の意識そのものも変容すると思われる.ここでは,オーラルヒストリー調査などによって得られたコミュニケーションの内容をテキスト化した上で,意識変容やコミュニケーション生成の下敷きとなる人間関係とあわせて分析することを試みる.まちづくりの現場における意識変化に焦点をあてることで,まちづくりの対話を創発し得るデザイン言語がコミュニケーションの中でどのように生まれ,変化していくのかを分析してみたい.

a)オーラルヒストリーについて

口述による歴史的事実に関する証言をオーラルヒストリーと呼ぶ.従来,フォーマルな記録しか史料として認められなかった歴史学の分野や文字情報として起こされない人々の知識に対して学術的な価値が認められつつある.政治学・歴史学などの分野においてオーラルヒスト

リーとは「公人の専門家による万人のための口述記録」と考えられていたが,御厨(2002)は「この十年で急速にオーラルヒストリーが市民権を得たことを考えると,公的体験を有する人のみならずいわゆる庶民や名もなき人にまで改めて対象とする人々の背景を広げてよい」と述べている.また,後藤ら(2007)は「まちづくりオーラルヒストリー」を提唱し,1)記憶の採集,2)口述史記録の編集,3)コミュニティ史の編纂,4)コミュニティの将来像の構築を通じた内発的なまちづくりの手法論を模索している.

b)デザイン言語について

まちづくりの現場においてもデザイン言語の重要性が指摘されており,プローブパーソン技術を背景としたライフログ技術や,都市像の可視化,これらを下敷きにしたライフスタイルランゲージの提案などはこうした文脈に位置づけられよう.いかにして市民の共感をえながらまちづくりの協同デザインを進めていくか,その上で,その都市における生活体験や市民の内部知識,記憶の収集を行い,いかにしてそれを空間や時間と立体的に結びつけながら「物語化」するかが重要である.そしてそこから実践可能なデザインコンセプトを生み出すことが求められているといえよう.本研究では,デザインコンセプトが生まれる過程についてテキストをキーにした分析を試みる.デザインコンセプトの形成に影響を与える「物語」とその「物語」を獲得するための行為の関係を



図-1 愛媛県今治市の位置

解析することで、デザイン言語のありかたについて考察を行いたい。

(2) 研究のフレームワーク

本研究では現地インタビューによる地域住民のオーラルヒストリーの収集を通してデザインコンセプトを考え、これを地域の共有知として再構築させ、地域住民に提案するというプロセスで行われる。本論文は現時点までに行ったデザインコンセプトの議論過程部分までについて言及するものである。

2. 風景づくり活動の概要

(1) 開催概要

風景づくり夏の学校は、地域の風景づくりについて具体的なフィールドを設定し、受講者自身が地元の人々との対話に基づいて地域らしさを十分に読み込んだ上で、視点場や動線、風景づくりに参加するプレイヤーの主体的な参加プログラムの作成に留意しながら、地域らしさを生かした風景づくりのプランニングを行うことを目標として毎年開催しているものである。今年の風景づくり夏の学校では愛媛県今治市の中心市街地および周辺部（大島・波止浜・波方地区）を対象地域として選定した。対象地域の概要を次に説明する。

(2) 対象地域

愛媛県今治市は近畿地方と九州地方を結ぶ瀬戸内海航路の中間に位置し、古来より海上交通の要衝として栄えてきた。特に来島海峡は日本三大急潮のひとつで知られ、現在は外国籍の大型船が航行する国際航路でもある。瀬戸内海側で広島県尾道市と隣接しており、10年前に島々を橋で結ぶ西瀬戸内自動車道、通称しまなみ海道が開通したことで自動車を利用した行き来がかつてない増加を

見せている。

しかし一方で従来四国本島と島嶼部を行き交っていたフェリー、連絡船の便数は減少の一途をたどっており、地元住民の生活に影響を与えている。また港の旅客数減少と共に顕著なのが中心商店街の衰退化であり、かつては四国一の来客数を誇ったものの現在ではシャッターが下りた店舗が目立つ。中心となるドンドビ交差点にあった大型百貨店大丸も昨年撤退し、より一層空洞化が進んでいる状況である。このような状況下で今治市では港湾施設の老朽化を中心とした港の再開発事業が予定されている。

(3) 活動概要

a) 調査概要

本調査では今治港、中心商店街、波止浜、波方および大島にて生活者を対象としてアンケートを実施した。対象者の日常生活および自分と海や港との関係についての質問を行った。質問の際には地域の地図を提示し、具体的な場所について指示をしてもらった。そして最後に選択形式で同様の質問に対して回答結果を取った。

b) 基礎データ

今回の一連の活動を通して、2つの種類のデータが取得できている。1つは行ったヒヤリング調査の内容であり、これについては個人属性および質問内容に対する回答がセンテンスによって得られている。

取材を行った学生とのコミュニケーションの仕方によって引き出している情報もあり、ラベル付けを行った上で分析を行うことを考える。また、プレイヤーは、自らオーラルヒストリー調査を行い、プレイヤー同士の対話を経た後に、自らまちづくりの提案を行っており、7月からの活動を通して当該地域における意識が変化したの

表-1 ヒヤリングデータの例

聞き手	話し手
橋が出来てから、商店街はどう変わったと思われますか？	橋が出来たから、というよりは橋の影響というのはないですよ、おそらく。橋が出来たのは11年前ですよ。その前に郊外店というのがフジが出来たのがちょうど11年くらい前で、橋と一緒に。そして、ニチイがそこありますよね。マルナカさんのところに。で、大丸があり、その少し前、15年くらい前までは高島屋があったんですよ、この木原パーキングに。
そうなんですか？	15年から18年くらい前は、高島屋の跡地なんですよ、そこは。ですから、中心部から郊外店にシフトして行ったんですよ。196号線の開通により。ですから、橋よりそっちの方が影響が大きいのではないかな、と思うわけです。
ちょうど橋と同じ時期だから、橋が出来た影響があるんじゃないかと考えられるけれども、実際は郊外店舗の方にお客さんがいらっている。	いっていますね。それで、橋が出来てからすぐにはフェリーはなくならなかったんですよ。
はい。	ある程度補助金も下りましたし、営業も平行してやっていたんですけど、ここ5年くらいで、一気に、フェリーがなくなりましたよね。で、その影響は出てきましたね、今も。
	特に通行量としては港のあたり、新町の三丁目というところなんですけど、このあたりを通る人は本当にいなくなりましたね。今度はここは大学のフェリーがなくなり、大島のフェリーも間引きされると。となると、もう一つこの通行としては、歩く人はなくなりますが。ですから今後は、これ以上は落ちようはないんじゃないかな、と。
	橋=商店街というのは違うように、私は思います。

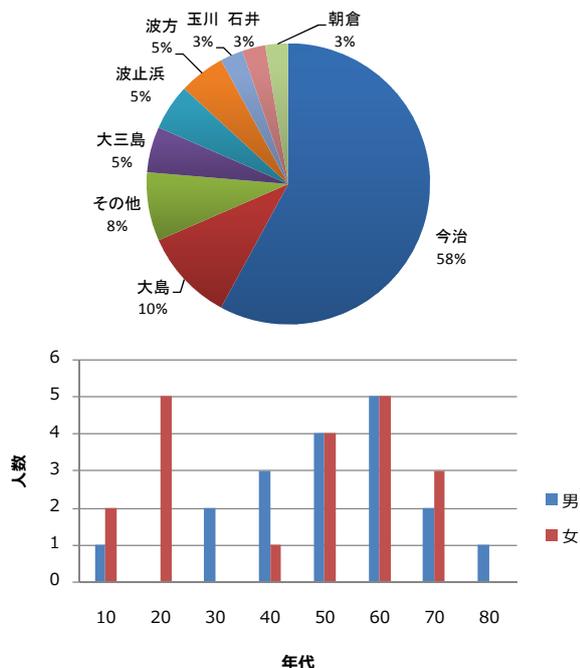


図-3 回答者居住地分布及び個人属性別人数

かを把握することができる。本研究では取材内容・コミュニケーションの履歴をたどりながら、意識形成の過程を明らかにしていきたい。

3. 分析

各項目に関する回答結果の分析を行う。今治の地理的特徴であり観光資源としても重要な「海」に対してエリア内生活者がどのようなイメージを持っているのか調べるため、視点場として{橋、船}の2つを提示し、選好を調べた。全体で回答結果は{17名, 17名}とに分かれる結果となった。居住地域別でみると、今治エリアに居住する被験者内でもほぼ同数の結果となった。他の地域では差異は生じているが人数差は少ない。

今治市中心部への滞在頻度については中心市街地居住者以外は全般的に低い結果となった。個人属性別でみると40, 50代女性が高くなった。これは商店街の構成店舗に起因するところが大いと考えられる。

港の再開発事業の認知度については、「よく知っている」が6名、「聞いたことがある」が14名、「知らない」が17名という結果になり、約半分の被験者が事業について認知していない結果となった。港でのヒヤリング調査では比較的認知している被験者が多い結果となった。

中心市街地から撤退した大丸の利用頻度については、38名中32名が利用したことがあるという結果となり、地域において集客力があつたことが伺える。大島でヒヤリングをおこなつたある女性は近辺で高く良いものを買入しようとした際には大丸へ行かなければ該当するものが見つからなかつたと答えており、代替手段が存在しな

表-2 ヒヤリング調査概要

項目	調査内容
日時	2009年7月11日～12日
対象人数	43名中38名が有効回答(88%)
調査参加者	大学院生7名
対象地域	今治中心商店街(来訪客・店主), 港, 波止浜, 波方, 大島
調査方法	選択型質問
自由回答質問項目	1)日常的な消費行動場所, 交通手段, 利用期間, 2)中心商店街の利用の有無, 目的, およびこれらの変化 3)海浜地区への来訪頻度, 活動内容, 船を利用した行動について頻度・範囲・目的等, これらの変化 などについて質問をしながら自由回答。
選択回答質問項目	1. 海の視点場としての橋・船の選考意識 2. 市中心部への滞在頻度自己回答 3. 港の再開発事業について知っているか 4. 撤退した大型SCCの利用頻度 5. 新興住宅街への居住願望 6. 橋の完成による今治市島嶼部住民の生活への影響 7. 橋の完成による今治市陸部住民の生活への影響 8. 橋の完成による海とのつきあい方の変化 9. 子どもに対して期待する居住地

い買い物先の選択肢であつたといえよう。

丘陵部に計画されている新興住宅街への入居については全体で希望するものは1名にとどまつた。橋の開通による島嶼部の暮らしの改善については「よくなった」が15名、「かわらない」が8名、「昔の方がよかつた」が14名と意見が分かれる結果となった。特に今治エリア在住者の回答結果{8名, 5名, 8名}, 大島の回答結果が{2名, 0名, 2名}と回答結果に全体の分布が維持されており, 居住地域による差異が結果には現れなかつたといえる。

年代別に見てみると20代の被験者は{3名, 2名, 0名}となつており, 島の住環境改善を認めるがそれ以外の年代においても回答結果は分かれた。性別では女性は比較的改善を認め, 男性は昔の方がよかつたと答える傾向にある。次に四国本島側の暮らしの変化に関する質問への回答を見てみると, 全体では{15名, 13名, 8名}となり, 橋の開通による改善を認める回答が比較的多い結果となった。居住地別では大三島, 波止浜においては陸の部分で改善されているという回答結果が高い割合で見られた。

自由な意見では, しまなみ海道が開通したことによつて, それまでは渡海船やフェリーなどを利用しなければ移動できなかった島と四国本島の間を, 自動車を利用して移動出来るようになった。これによつて利便性は高まり, 特に島民にとっては事故などの際に救急車が現地に駆けつけられる環境が整つたことは島での生活水準を大きく向上させている。しかしその一方で, 外来者の島への流入による治安の悪化, ゴミの不法投棄, また区間料金日本一高額(来島海峡大橋)であるなどのマイナス面も少なくはない。といった点が指摘されている。

大三島の方からは本土部分の生活が改善されているという意見があつたが, これらの被験者に共通する事項として, 自分たちの生活は橋, 道路の開通によつて大きく

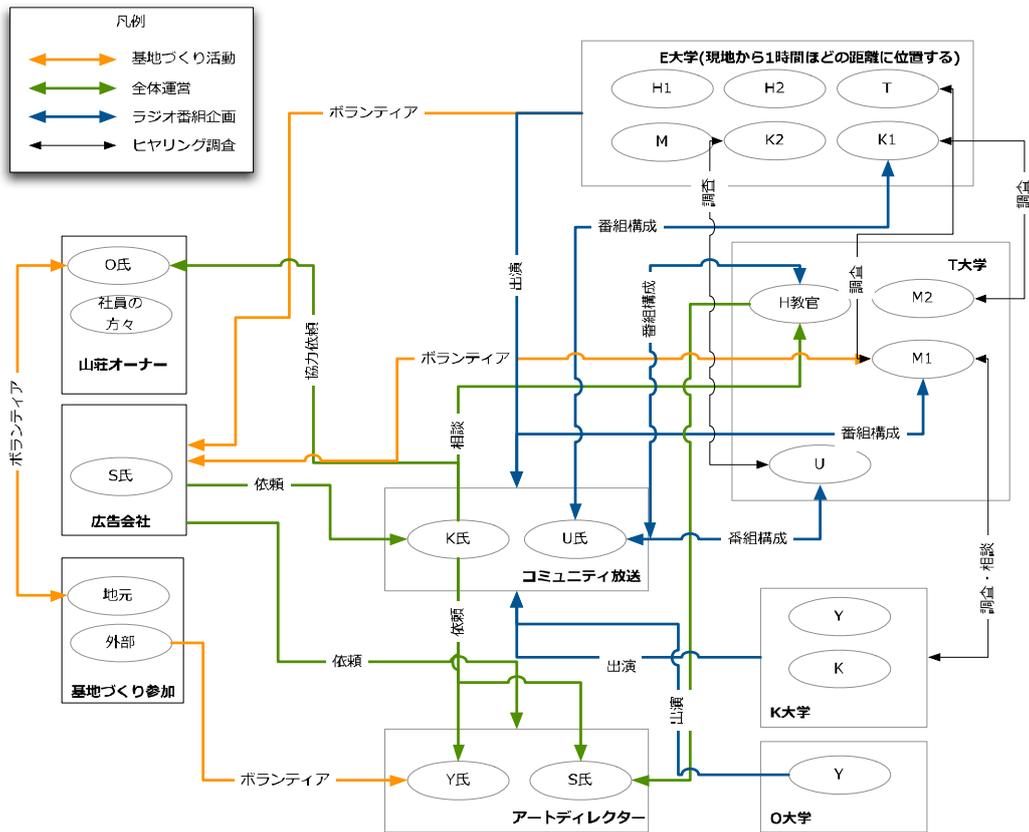


図-4 活動参加者間ネットワーク図および活動の様子

改善されたとは述べていないことから、船を変わず利用し続けている自分たちとの差分として改善されているだろうという憶測が被験者内でなされていると考えられる。

4. ソーシャルネットワーク分析

夏の学校では10周年記念事業のアートフェスの一環で行われる吉海町内の山荘リノベーションに参加し、地元住民、外部からのアーティスト・建築家との共同作業を大学生が行った。本プログラムを通して、複数の主体間におけるつながりと様々な対話が生み出されている。こうしたネットワークの分類を次に示す(図-4)

- a) 内々交流
ラジオ出演者間、山荘オーナー-地元ボランティアスタッフなど
- b) 内外交流
学生-地元住民・リスナー、学生-コミュニティ放送スタッフ、学生-基地づくり参加スタッフなど
- c) 外外交流：学生-外からのボランティアスタッフ
橙色は基地づくり、青色はラジオ番組企画、緑色はアートフェスティバル企画運営に付随して形成されたリンクを意味する。
こうしたつながりを背景に、オーラルヒストリー調査と様々な対話が、プレイヤーの意識に働きかけ、まちづくりに対する意識は大きく変化していくことになる。

5. まとめ

本論文では風景づくり夏の学校の実践におけるインタビュー調査を通してのデザインコンセプト提案過程と、地域内外ネットワークの構成過程を考察するための準備を行った。今後の課題として、さらなる調査内容の精査、ライフスタイルランゲージの構築、アーカイブ閲覧システムの作成が挙げられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、京都大学山口敬太氏からは分析方法について多くのアドバイスをうけるとともに、片岡由香氏から多大なる励ましを頂いた。また、今治コミュニティ放送黒田周子氏、宇佐美浩子氏、セーラ広告白川淳氏、アートディレクター矢内原充志氏、青山石工房小田造成氏、横浜市芸術文化振興財団杉崎栄介氏、風景づくり夏の学校参加者の方々から多大なるご協力を頂いた。ここに感謝の意を示す。

参考文献

- 1) 羽藤英二：風景づくり夏の学校 -実践的風景づくり教育の取り組み、交通工学第42巻増刊号, pp. 48-53, 2007
- 2) 社会学とオーラル・ヒストリー ——ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に、大原社会問題研究所雑誌, No. 585, 2007
- 3) 後藤晴彦, 佐久間康富, 田口太郎：まちづくりオーラルヒストリー, 水曜社, 2005